

# 体育学における人間学的論議と その拡がりの方向性

— Guardini, R. の教育学に基づいて —

阿部 悟郎

- 〈目次〉
1. 序論
  2. 本論
    - 2.1. Guardini, R. とその教育学における人間学的論議の出発点
    - 2.2. Guardini, R. の人間学的論議とその基底の視野
    - 2.3. Guardini, R. の人間学的論議とその動的視野：人格的生成への実存的契機
    - 2.4. Guardini, R. の人格的実存の論議とその有効性
    - 2.5. 体育学における人間学的論議とその一つの方向性
  3. 結論
  4. 註および引用・参考文献

## 1. 序 論

体育学が自覚的に体育の本質を問い、それを学的営為において追究していく場合、所謂、「人間とは何か」といった問いの形式に代表されるような、人間学的な問題に不可避に突き当たることであろう。実のところ、体育学において、そのような人間学的問題は、永遠の課題と言われて久しい<sup>(1)</sup>。ところが、体育学におけるそのような論議は必ずしも活発であるとは言えず、その問題設定のありかたも決して徹底しているとは言いがたい。無論、そのような人間学的課題は、まずもって純粋哲学の本務であるかも知れないが、それが体育学において不可避な課題である以上、それについても体育学的意識において自覚的に問いを設定し、学的探究を試みていかななくてはならないように思われる。

さて、そのように考えてみても、所謂、人間学的課題はやはり哲学領域における伝統的な問いであり、そして極めて難解な問いの一つであることを考え含めるならば、体育学におけるそれについての探究も、徒手空拳のままでは、おそらく困難を極めることは疑いない。そこで、体育学は、そのような人間学的課題を探究していく上で有効な知見に正しく学び、その人間学的な思考能力を培っていかなくてはならない。ただ、この場合、哲学領域における人間学的論議の有効性もさることながら、やはり教育学における人間学的論議により直接的な有効性が認められるのではないだろうか。実のところ、教育の論議や省察は人間理解の問題と全く結び付いており<sup>(2)</sup>、そこには原理的な連関さえも認められるという<sup>(3)</sup>。なるほど、教育が人間の全体や多面に関わるものであることを考えるならば、教育学は教育の本質を語るうえで、不可避にそして必然的に、人間それ自体についての固有の視点を要請する<sup>(4)</sup>。教育学において、教育の本質論議と人間理解に代表される人間学的論議は、根源的に不可分なのである。そして、体育がその概念の基底に教育を有し、教育と概念論上の範疇を同じくすることにより<sup>(5)</sup>、体育学の人間学的な事情は教育

学のそれにおそらく類比的であるように思われる。このような意味において、体育学は、差し当たり、教育学における人間学的論議に目を向け、その人間学的契機を正しく踏まえていく必要がある。

さて、体育学が教育学の知識体系に目を向け、そこに人間学的論議を探っていく時、前述の如く、教育の論議や省察が人間理解の問題と原理的に結びついているが故に、もしかしたらそれらの諸形式は全く随所に散見されるかも知れない。ところが、体育学が教育学におけるそれらの人間学的な論議に有効な資料価値を見出すとしても、その膨大なる英智の全てに普く切り込んでいくことはやはり難しい。そこで、一先ず、それらにおいて人間学的論議のより明確な形式に着目してみたい。教育学における人間学的論議の潮流において、人間学的問題設定をより直接的・自覚的に試みた理論形式を汲み上げようとする時、そこにはドイツ教育学の近代以降の諸形式、例えば、伝統的な陶冶論とそれを批判的に超克したと思われる精神科学的教育学、さらには大凡その流れに乗じたと思われる人間学的な教育学等の諸形式が映じてくることであろう。おそらく体育学は、人間学的論議を適正に進めゆく為にも、本来、それらの一つ一つに周到に学び、その人間学的な思考能力を耕していかななくてはならない筈である。ここではそのような試みの端緒の一つとして、人間学的な教育学に焦点を当て、その枠に括られている<sup>(9)</sup> Guardini, R. の人間学的論議を取り上げてみたい。

ところで、Guardini, Romano (1885-1968) の人となりや略歴等のおよそは別稿<sup>(7)</sup>において既に紹介済みである。おおまかに繰り返すならば、Guardini, R. は、実のところ、教育学者というよりは、寧ろカトリック神学者・宗教哲学者として高名であり、その円満な人格とその深い学識は戦後の世代に大きな影響を及ぼしたという。Guardini, R. は、二度にわたる大戦の凄惨さや醜悪さ、そして悲惨さから、近代以降のそれまでの人間学的認識に懐疑の目を向け、このような懐疑や危機意識を出発点として、<sup>(9)</sup> 実存主義哲学と教育学の理論的關係を論究しながら、新たな人間学的認識に支えられた教育学を模索していった。<sup>(10)</sup> そして、Guardini, R. は、そのようにして導かれていった深

い人間理解と世界観に基づきながら、人間の実存的可能性を問いつつ、教育の本質論議に関わっていったのである。<sup>(11)</sup> 彼の人間の存在や実存への鋭敏で豊かな眼差しは、やがて教育学における人間学的論議を立ち上げ、Döpp-Vorwald, H. や Bollnow, O. F. と学的交流を深め、そして議論を実り豊かに闘わせていったのである。そして、この辺りの論議の動態から教育学における人間学的論議は新たな局面を迎え、有効な拓がりを得ていく。このような意味において、Guardini, R. の人間学的論議とその学的成果は、教育学における人間学的論議においては、看過し得ない重要な知的契機の一つであることは疑いない。とりわけ、彼の人間学的論議において拓かれていった実存主義的とも言い得る人間学的視野は、傾聴に値するように思われる。

そこで、本稿においては、体育学の学的確立の為に、教育学における人間学的論議、取り分けGuardini, R. の教育学の分析を通じて、体育学における人間学的論議とその方向性の視野についての模索を試みたい。

## 2. 本 論

### 2.1. Guardini, R. とその教育学における人間学的論議の出発点

所謂、近代と呼称される時代の学問的な状況は、その自意識の高揚とその自律性の規定への専心に象徴されるという。<sup>(12)</sup> それはまさに中・近世の呪縛から解放されて、自らが主人公となった近代人の感情の表れ的一端でもあった。<sup>(13)</sup> Guardini, R. はまさにその真っ直中にあり、「まさにそれはそれまで閉ざされていた深まりから湧き起こってきた熱狂的な爆発のようであった」と懐述する。<sup>(14)</sup> そして教育学もそのような風潮の流れにあっては同様であった。即ち、教育学は、学の自意識の高揚の中で、その教育学的な本質や他のものから独立した特別に教育的なるものを追究していったのである。<sup>(15)</sup> そして、教育学は、そのような熱狂的状况の中で、やがて自らの独自の起点を、人間生命の「生成衝動」や「形成衝動」、即ち人間のうちにある豊かな形成力へと求めたの

であった。<sup>(16)</sup>ところが、これによって、教育は次のように描かれていってしまった。<sup>(17)</sup>即ち、植物がその種子に宿る素質を次第に開花させていくように、人間もまた彼の生命のうちにある可能性を、自己に固有の法則に従って、次第に発展させ、実現させ、教育は、そのような内発的過程を十分に保護する、と。そして、教育学は、教育にとって「固有なもの」や「本質的なもの」を、そのような内発的な発展過程にみる様々な領域的範疇に求めていったのである。<sup>(18)</sup>つまり、教育学は、特別に教育的な価値を純粹に取りだそうとはせずに、その陶冶過程を個々の価値領域へと配列したのである。<sup>(19)</sup>これによって、教育学は、その自律性の追究において、人間の全体を部分的・領域的範疇へと断片的に解体してしまったのである。<sup>(20)</sup>実のところ、その根底には「人間におけるさまざまな創造力に対する信仰」が潜んでいる。<sup>(21)</sup>そして、これによって、教育学が、人間のもつ個々の要素、特性、構造の独自な力を明らかにして、そして教育がそれらの発展に働きかければ、各部分はやがて全体としての調和を保ちながら、人間は全体としてのびのびと調和的に発展していく、と主張されていくに至ったという。<sup>(22)</sup>そのような論議にみる人間把握は、Bollnow, O. F.の述べるように、些か楽天的、そしてロマンティックに過ぎる。人間の生成や形成は、おそらくそのように安易なものではない。考えてみれば、教育学の自律性追究における人間学的論議には、二重の誤りが認められる。それらは、まず起点としての観念的楽観性であり、次いで教育学における課題設定としての自律性追究の適格性である。少なくとも、それらは重要な問題を孕んでいる。

まず、起点の観念的楽観性については、当世の熱狂のさなかにあった教育を含む文化一般を一貫する観念の近代性と言えなくもない。そして、それは同時に、人間の本性と文化創造への無限の進歩と発展についての力強い宣言でもあった。<sup>(25)</sup>ところが、歴史はそのようには進まなかった。「人間の(為す)ものごとというものは近代が考えていたようには、(易々とは)進行しないものなのである。」<sup>(26)</sup>やがて世はあの大戦へと突入し、大量殺戮や文化の破壊、目をおおわしめるような残虐と狂乱、そのような悲痛な現実が、あのような

人間把握に疑義をもたらしたのである。<sup>27)</sup>そして、Guardini, R. は、教育を含む近代文化の熱狂に駆り立てられた人間把握の誤りを決定的に認識し、その重大さを憂慮したのである。<sup>28)</sup>

次いで、Guardini, R. は、まず自律性の論議それ自体がもたらした盲目的過失を思念する。教育学におけるあのような自律性の追究、即ち、教育的に固有なる特別なものを求めることは、そもそも可能なのか、それ自体も問題とならざるを得ない。Guardini, R. は、教育学をも含めて、多くの文化領域が、それらに固有な文化領域を求めることによって、生が全体目的や連関を喪失して、ただ部分的な目的に安住しようとするところに問題をみるのである。Guardini, R. は、次のように述べる；

「自律性の追究は、明白な誤りを孕んでいる。それはまさに分断性への方向である。即ち、独自の存在において単一の特定区分が作り出され、それは突きずらされた局面に対する人格的全体連関と同様に、対象の全体性における特定区分のようなものである。真なる純粋性への意志は、確かに特別な基礎付けを求めるものではあるとしても、しかし恰も勿体ぶったような特殊分割などではない。」<sup>29)</sup>

教育学における、あのような自律性の追究において、人間がそれを取り巻く全体連関から遊離して、単なる部分があたかも全体であるかのように誤って考えられるならば、結局は生の全体が部分に解体されてしまう。ところが、当世の教育学は、所謂、近代の熱狂のさなかで、教育にとって固有なものや本質的なものを、人間存在の部分や領域を統一する全体的範疇ではなく、全体から切断された部分的、領域的範疇に求めていったのであった。<sup>30)</sup>これによって、人間の陶冶過程は、直接、個々の価値領域、例えばそれらは、認識的なものであったり、倫理的なものであったり、そして生物的なものであったりする価値領域のもとに分断的に配置されてしまう。<sup>31)</sup>そして、人間の存在とその生成は、やがてそのようなさまざまな範疇の中に解体され、そして組み入れられていく。<sup>32)</sup>人間の生やその存在が、教育学においてすら、そのように

相互に連関を失った個別の対象の数々へと分断的に崩壊させられてしまいかねない。Guardini, R. は、次のように述べる；

「(教育学においては) 数多くの対象領域や基本的作用、価値や基準等の統一体としての人間実存の全体性についての感覚、そして絶対的な自律性への意志によって導かれた領域の連関喪失が如何に無益なものであるかについての感覚、それらが問題として立ち現れてくるのである。それらの関係や相互の価値、そしてそれらを(存在や生成へとどのように) 導き入れていくかといった問題は、差し迫った課題なのである。」<sup>34)</sup>

従って、とりわけ教育学においては、生の分断的崩壊は許し難い。自律性の追究は、人間存在の全体性についての否定を惹起するものであるから、それらが如何に学問的な形式と論理を備えていようとも、そこで把握されるものは、真の人間の姿ではなく、偏った姿である。<sup>35)</sup> 本来、教育学は、存在者の全ての領域を貫くものなのである。<sup>36)</sup> それ故に、Guardini, R. は、教育学におけるそのような自律性の問題に対しては次のような構えを採る；

「絶対的な自律性を相対的なものへと組み入れること、即ち、一時的な分離からその本質に適合した全体の秩序へと到らしめること」<sup>37)</sup>

これによって、教育学の自律性は、分断的な崩壊を回避し、その相対的自律性の獲得によって確かな基礎付けを得ることとなる。そして、この場合、問題として立ち現れてくるのが、秩序の全体性となる。即ち、それは微細に分断された諸現象を、正しく連関付ける生の根源的原理の総体である。Guardini, R. は、この人間の全体性の問題は、それまでの人間把握において見誤られてきたものであると説く。<sup>38)</sup> そればかりか、それまでの人間把握の試みは、人間を真に見てはいなかったとさえ言い放つ。<sup>39)</sup> 教育学においては、先ずもって人間存在の全体性こそが、何よりも正しく語られる必要がある。そ

こにおいてこそ、人間の存在の真なるものの一端を窺い知ることができるのかも知れない。これによって、Guardini, R. は、自らの教育学において、人間の存在の全体性への探究を通じて、人間の真なる姿に接近していこうとする。ここから Guardini, R. の人間学的論議は出発するのである。

## 2.2. Guardini, R. の人間学的論議とその基底的視野

さて、Guardini, R. は、前述のような人間学的な憂慮の後に、その自らの学的認識において人間存在の根本、あるいは人間存在の全体像を模索していった。そして、彼はやがて自らの探究において像『das BildまたはBild』という考え方に辿り着く。即ち、Guardini, R. によれば、像とは、人々の存在の根底<sup>(41)</sup>にあって、その存在現象を根源的に規定する。このうちなる像こそが人間を本質的に規定し<sup>(42)</sup>、部分を統一する全体なのである<sup>(43)</sup>。差し当たり、これによって人間の様々な部分や諸々の要素がその存在の根底において全体としての像に位置づけられていく。そして、人間はあのように相互に連関を失った個別の対象の数々への分断的な崩壊が回避され、それぞれの個別性は人間の全体性において統一的に連関付けられていく。即ち、それらは全体との相互関係を持つことができ、それらはようやく固有な独自の力を人間の生の統一性において発揮するのである。Guardini, R. によれば、まさに、人間は像から形成されているのである<sup>(44)</sup>。そして、人間はその存在の根底において、まさに像として統一的な存在であるということなのである。

ところで、Guardini, R. によれば、像には様々な種類があり、それらはその発現形式に相違が認められるという<sup>(45)</sup>。そして、人間の像は、非生物や所謂、生物のそれと異なり、精神によって規定される<sup>(46)</sup>。精神はその創造によって、普遍の領野と連関し、人間をそこへと高めゆこうとする<sup>(47)</sup>。それ故に、人間の像は、無限の高まりを希う形成動機をそこに胎動している。そして、Guardini, R. は、そこに「神の似姿」『das Ebenbild』をみる<sup>(48)</sup>。そのうちなる形成動機は、自らを貫き、そこへ到ろうと躍動し、似姿として真なる神の領野を希い、そこに迫りゆこうとする動機を内に秘め、その存在を突き動かす。



それを Guardini, R. は次のように表現する。「私は生きている。そうであるのに私のうちには私ではないキリストが生きている。」なるほど、Guardini, R. の比喩に倣えば、人間にはその存在のうちに神がその似姿として住まう。そして、そのうちなる神は、存在の最奥において創造的に躍動し、恩寵の高みへと昂まり到ろうとする。まさに Guardini, R. によるならば、人間の像は、その真意において神の似姿なのである。

このような意味において、人間の像は、高まりゆくとする形成動機を胎動する上昇的な存在形成の可能性に象徴される。おそらく多様な契機がそこに有意味に染み込み、その存在形成の可能性を豊かに耕し、そしてよりよく高まっていく。そしてそのように神の領野へと次第に高まりゆく存在形成の可能性の全体は、像として再構成され、そして像としてその存在のうちに潜みゆく。この像のありようやその限界においてのみ、人々はその実存を成就し、多様な存在形姿をその存在に実現し得る。人々の如何なる生の実質的な諸形式も、このうちなる像のありように根源的に起因する。それ故に、像とは、まさに人間の存在形成の可能性の統一的全体として考えられる。ここに、Guardini, R. の人間学的論議における基底をみることができるのである。

### 2.3. Guardini, R. の人間学的論議とその動的視野：人格的生成への実存的契機

さて、Guardini, R. の像論理によって、なるほど教育学における人間学的営為は確かな基底を得て、ようやくそこに全体性と根源的な統一性を得ることができる。そして、それ自体、一つの思考形式として有効性を持つように思われる。ところが、このような思考形式は、確かに人間の生成や形成の本質を規定するうえで極めて重要な契機であるとしても、その先験的な規定性によって、人間のダイナミックな生成を形式化し、固定化するおそれもある。即ち、像という概念は、そこに内容的に確定的な内実を、先験的にその基準として与えがちであり、それが為<sup>(51)</sup>に、人間の存在形成の自発性を弱め、新たなものの生成を見失いかねないという<sup>(52)</sup>。なるほど、神の似姿としての像とい

う思考方法には、そこに神性へと到る召命のようなものが予め想定されており、人間の存在とその生成は、その思し召しに従い肅々と進みゆくかのように捉えられてしまう危険も否めない。人間の存在もそしてその生成と形成も、実際は、前述のように、神の思し召しに従い肅々と進みゆくような安易な道程ではない筈である。おそらくそれは、実の処、極めて力動的なものなのではないだろうか。人間は、現実との厳しき対決においてこそ生の実質を営んでおり、決して無害な「真空状態」<sup>63</sup>において生を安穩と遂行している訳ではない。そればかりか、人間の存在も生も、そして実存も、その実はそれが最高の可能性と同時に極度の危険にも晒されているのである。<sup>64</sup>従って、如何に人間がそのうちに創造の自由を胎動しているといっても、非合理的な矛盾や抵抗で埋まる現世においては絶えずその本質が脅かされており、それを思念すればする程、人間を固定的に把握するのは、いとも危険であると言わざるを得ない。<sup>65</sup>神の像への陶冶というような先験的な抽象化や形式的な固定化は、その人間学的論議において、現実において生成発展しゆく人間の具体的・歴史的要素が無視される危険がある。<sup>66</sup>Guardini, R. は述べる；

「自己それ自体に閉じこもった人間やその本質形態は存在しない。また、人間の生成に前もって与えられる内容というものも存在しない。あるものは、ただ生成する人間であり、そしてただ事物に彩られた現実の（生の）空間のみである。<sup>67</sup>」

やはり、それが如何に有効な契機であるとしても、像という思考方法のみでは、人間の真なる姿を適正に把握し尽くすことは難しい。像が真の生きた像となるためには、その形式性に、豊かな意味を与える実質的な契機が必要とされるのである。そこで、Guardini, R. は、像概念の形式性と静的規定性を補う為に、人間の存在と生成の動的規定を試みることとなる。<sup>68</sup>そして、それらの弁証法的統一によって、人間の存在と生成の真の姿をみようとするのである。<sup>69</sup>

先ず、Guardini, R. のそのような試みは、まず人間の存在やさらにはその

人格現象を動的に認識することによってなされる<sup>61)</sup>。先の通り、人々がそこで具体的実質的な生を送る世界は、決して無害なる真空ではあり得ず、そこには風雨も荒れ地も、そして自らに迫り来るものもある。人々はそのような世界において現存在を呈する。それは、豊かさを自らのうちに秘めつつも、ある匿名の存在として無為に現世に浮遊していることもある。ところが、人々が、自己の主導性から生きようとする時、それと同様にそれ自体として構築し主導性を有する他者や、それ自体のやり方で存在している諸々の事物と出会い、そして状況と遭遇し、そこに邂逅 *Begegnung* が生じる<sup>62)</sup>。まさに、人々が自らの責任のもとで行為し、そして自らを創造しようとする時、邂逅が生じ来るのである<sup>63)</sup>。そして、その時、人間存在は人格として立ち現れる<sup>64)</sup>。即ち、現世の具体的・歴史的状況において神の似姿としての像は、邂逅において人格として世界に峻立し、その存在を主張するのである。Guardini, R. は、次のように述べる；

「邂逅 *Begegnung* において、(人間の存在のうちから) 何かが現れ出でくる。一回性の邂逅という状況においてのみ現れ出る得るものが、自らのうちからほとばしり出るのである。そのような一回性における決断において、自己は生成する。そこにおいて運命も充実する。人格—まさにこの人格は、自らが責めを負い、邂逅を創造的に克服するうちにこそある。そして、そのような生成の瞬間はいつのまにか通り過ぎ、新たな生成の瞬間が近づいてくる<sup>65)</sup>。それが全てなのである。」

Guardini, R. によれば、人格は、そのような邂逅という具体的な状況において、うちなる具体的実質的形象としてその存在に実現されていく。そして、邂逅において人々はなにものかにかに生成する。あるいは、邂逅において人々は自己へと生成する。それはまさにその邂逅という状況においてのみ実現され得る一回性の代替不能な自己の実現である。換言するならば、うちに秘めた存在形成の可能性の豊かさは、邂逅という状況によってこそ人格態をとり、その存在において実質的なものとして実現されるのである。人間の存在と生

成を動的に捉えようとする時、そこにあるのは抽象的な人間存在では決してなく、様々な具体的・実質的な存在者である。それは邂逅において実現された可能性の人格態の一形式である。それ故に、Guardini, R. の謂は些か先鋭的ではあるが、人間の人格的な実存には、邂逅こそが全てであり、それ以外にはないという。例えば、Guardini, R. は、このようにも述べる；

「そのような一回の出来事の度に、うちなる泉からなにもものかが出で来る。あるいは、かねてよりそのようなものを感じていたとしても決して意に介すことがなかったようなものが、いまやそれがうちなる輝きをもたらしてくれるのである。遭遇した現象によって人はなにもものに成る。そう、それは自らの土壌の深まりから湧き出で来る水のような根源的なものである。地質学的事実によれば、地中の水流が集まり、ある増圧によって表面が活性化し、そして本質的なものが現れ出るようなものである。それはまさに深まりから湧き出づる泉であり、永続的に湧き出づる水流であり、自らにそれまで注ぎ込まれたものの現出である。それはまさに不可侵なる神秘であり、未だに枯渇することなく、そして生において最新のものに似姿になりゆく。

これが邂逅なのである。それは自らに新たな像を与えてくれる。それは、それまで持ち得ずして十分な存在理解にはあり得なかったものであり、そのような泉が何であるかを知らないうちに、実際にはそれまで存在しなかったような確かな存在局面(60)が示されていくのである。」

このように邂逅がもたらす生成は、それまでそこに生まれつつも決して知り得なかった自己の人格態である。即ち、そのような生成においては、たとえ何らかの形で予感していたとしても、決して明確な意識を払っていなかったような新たな局面がそこに湧き出るのである。Guardini, R. の比喩に従えば、邂逅はまだ見ぬ自己に光をあて、それによって存在のうちなる深まりにある泉から新たなものが湧き出で、そして輝く。なるほど、確かにうちに脈々と流れる水源の本質は、どこまでいっても正しく把握し切れない。その何たるかの一端を知る為には、よき邂逅を得て、それを人格的に実現しなく

てはならない。ここに人間理解の動的射程における邂逅の人間学的な重要性を窺い得る。

それでは、それは人々が日常的に経験するような出会いとは如何に異なるのであろうか。これについて Bollnow, O. F. は次のように述べている。

「如何なる任意の人間的な接触も、如何なる任意の人間的な遭遇も、ただそれだけで邂逅であるというのではない。厳密な意味において邂逅と呼ばれるものは、かなり稀な、そして極めて重大な出来事であり、人はそこで他者の核に触れ、それによって、それまでの生の全体が、全ての見通しや期待と一緒にひっくり返され、そして全く新しい何かが始まっていく。ただ、人々に運命的なことが生じる処にのみ、所謂、邂逅の本来的な意味を語り得るのである。」<sup>67</sup>

これによるならば、邂逅は、少なくとも単なる日常的な交流や突然の予期せぬ偶発的な接触のようなものではなく、人間の生や存在の形成において重大な出来事をもたらし得る特別なものと言えよう。人は、そのような邂逅においてその存在に新たな生をつくり出し、そこからまた新たな生成が進みゆく。先の Guardini, R. の謂を踏まえるならば、邂逅の一回性において、存在のうちから新たな何ものかが迸り出で、それによって新たな自己が生成されるのである。従って、そのような意味において、邂逅とは、一回性の戦いであり、そして創造への挑戦に喩えられていく。Guardini, R. は次のように述べる；

「そこには、全く測り知れない、そして予見し得ない邂逅の可能性がある。それは、ある種の戦いであり、そしてそれは勝利や破滅の可能性でもある。そこにあるものは、あらゆる崇高なるものや、悪意、没落、荒野、襲撃、恐怖、そして発見や征服、獲得等である。そして、現存在から完全性のカテゴリーは消え失せていく。それでも、もしそれが真実で勇敢であるならば、然るべき相応しいものになることができよう。ただ、そのような存在も、常に全く完全なるものではないのであるが。」<sup>68</sup>

従って、人間は邂逅においてうちなるものの真偽が試される。そこにおいて、人々は出会うものに屈すれば、それは自己が放棄され、そして自己が消滅し、屈しなければ自己自身になれるのである。従って、もしそれが真なるものであれば戦いに克ち、自らの真なるものをその存在に創造していくことができる。勿論、そのような戦いの過程で失うものもあるだろう。しかし、それは試金石によって削ぎ落とされた偽りのものであったのかも知れない。かくして、真なるものが堪え残る。そして、それが人格態をとりその存在に映えていくのである。これについて、Bollnow, O. F. は次のように述べる；

「人間は、邂逅において試験台に立たされる。遭遇するものの激しさに直面して、ようやく人間についての真なるものが明らかにされるのである。そのような衝撃において人間は自らを試さなくてはならない。人はそのまま存続し得るのか？ それとも、そのままでは存続し得ないのか？

このように、邂逅は、人間の固有の真性についての吟味である。そう、より厳密には、人のうちに既にある実体が、邂逅において確かめられるばかりではなく、むしろ、そもそも人間は邂逅においてようやく彼そのものとなるのである。それは、人間の究極的な核であり、自己または実存と呼ぶところのものである。」

確かに人々はそのうちに豊かさを秘めていても、自分ではその豊かさに気づきはしないかも知れない。ところが、人々は、ある邂逅を得て、その真なるものがようやく明らかにされる。人間は、邂逅においてその存在の豊かさを確認できるのである。ところが、それが戦いであり、挑戦である以上、勝利もあれば敗北もあり得よう。それでは、邂逅において、出会うものに屈することなく、それを克服し、自己自身を人格に実現する為には何が必要となるだろうか。Guardini, R. は、次のように述べる；

「それは一重に自発性の力であり、心の純粋性であり、世界を受け入れ、そして世界へと出ていく勇気、そして世界を克服する創造的なエネルギー、つまりは自らの検

証 Bewahrung<sup>(72)</sup>である。」

邂逅において出会うものは、特段、人間に何をすべきかを指示するわけではなく、ただ人間を自己自身へと突き返し、自己自身の新たな決断を迫るのである。<sup>(73)</sup>従って、人間は邂逅における一回性の決断によって世界へと出で立ち、新たな生成によって自らの真なるものを実体的に明らかにする。人々は、邂逅における一回性の状況を責任もって受け取り、そして克服していかなくてはならないのである。邂逅は、そのような創造的な生成の場を、抜き差しならぬ状況としてもたらしてくれる。それは人々に、自らをその荒波に立たせる勇気と、それを克服し得るうちなる豊かさについての検証を要求する。うちに育まれ、そして秘められた豊かさは自分ではわからない。そこで人々は然るべき邂逅を得て、そこで勇気をだして自らを試さなくてはならない。おそらく邂逅において人はなにかに成れるのである。

まさに人々は、そこで一回性の決断と検証によって、戦いを克服し、うちなる豊かさを人格態としてその存在に実現していく。これこそが、人間の究極的な核の実現であり、人格的な実存なのである。そして、このような邂逅とそこにおける検証という人格的な実存の論議は、先の像概念の形式性と静的規定性を補う、人間の存在と生成の動的規定と言えよう。<sup>(74)</sup>

さて、教育学における人間学的論議において、邂逅という契機が極めて重要であるとしても、それは、前述の如く、全く測り知れず、予見できるものではない。そして、一回的な状況において如何なるものに出会うかは、自分が求めて得られるものではない。<sup>(75)</sup>それでは、それは全く天災のように、忘れた頃に降り来るようなものなのであろうか。そして、人々はそれをその運命の流れゆくままに、ただそこに身を委ねていけばよいのであろうか。Bollnow, O. F. は、次のように述べる；

「本質的なことは、そのような邂逅というものが、決して一時的な交流において即席に人々に与えられるようなものではなく、ただ一重に自らにおいて永きに亘って持

続的な努力が続けられ、それによって人間のうちにつくりあげられた然るべき準備の  
うえに生じるものなのである。」<sup>(7)</sup>

従って、邂逅にはそれが邂逅として生じるだけの準備が必要なのである。そして、それは、それまでの生において積み重ねられてきた生成の実績が求められる。おそらく怠惰に時を重ねてきたものには然るべき邂逅は降り来たらない。そうではなく、たとえそれが降り来ったとしても、そのように生成的な準備が充たされていない人には、それを本質的な意味において邂逅として感じることなく、それを徒にやりすごしてしまうかも知れない。やがて彼はよき生成の機会を失ってしまう。人間がよき生成を遂げる為には、邂逅が必要であり、そしてそれは、実のところ、存在のうちなる準備状況が前提的に不可欠となるのである。

それでは、人々に邂逅をもたらし得る準備は如何にして可能なのであろうか。先の通り、そのような準備とは、人々が、その生成において永きに亘って持続的な努力が続けられ、それによってそのうちにつくりあげられた実績の総体として捉えられる。即ち、準備には相応の持続的な努力が要求される。Bollnow, O. F. は次のように述べる；

「陶冶 Bildung は、なるほど諸科学がそうであるように、確かに真なる邂逅そのものを保証しはしないが、そのような邂逅に対する準備を人間にもたらしてくれるのである。そして、それは人間がそのような真なる邂逅に対して準備し得る唯一の方法であるように思われる。」<sup>(7)</sup>

Bollnow, O. F. に従うならば、邂逅には然るべき陶冶が前提とされる。考えてみれば、ものよさに感動する為には、確かにそのよさを感知し得るだけの練り上げられた価値意識が必要である。倫理的に揺さぶられるような危機的状况は、確かに相応の倫理意識が育まれていないと生起し得ない。偉大な人間が自らの存在に対峙する時、その激しく迫りくる偉大さを適正に感



知し得る程度に感受性が高まっていならば、それは彼に邂逅をもたらさないことであろう。人格的な練度が拙いならば、邂逅はただの刹那的な交流に留まるかも知れない。即ち、人間の人格的実存は、その基底に陶冶を有する。陶冶の程度は、邂逅の可能性を制限し、ひいてはその人格的実存の可能性を制約する。つまり、比喩的に言えば、人格的な実存の実現は、無から唐突には飛び出てこない。寧ろそれは、それまで培われてきた有の混沌から何らかの然るべき契機によって、ようやく実体として形式化されて立ち現れるのかも知れない。それは永きに亘る努力が必要なのである。永続的な陶冶の努力は、その存在のうちに潜む有の混沌の豊かさを耕し、存在形成の可能性を高めゆく。そして、敬虔な瞬間も、崇高な瞬間も、そして克服も創造も、それらが人格的な実存という、自己の豊かさの検証である限りにおいて、それまで永続的に耕されてきた可能性の混沌から湧き出づる。従って、人格的実存は、それが邂逅のもたらず瞬間的な生成的成就であるにせよ、それは単なる刹那ではなく、それは寧ろ永続的な生成が耕してくれた存在形成の暫定的総括という点で、その生成史の時間軸上の、ある程度の区分的連続性の上になり立つと言えよう。ここに人格的実存と陶冶の人間学的な連関をみることができる。教育学における人間学的論議において、なるほど邂逅にみるような人格的実存という動的契機が有効であるにせよ、やはりそれは単独で論じ得るようなものではなく、人間の存在と生成における永続的な陶冶へと及ぶ基底的視野によって支えられているということを重要視しなくてはならない。

## 2. 4. Guardini, R. の人格的実存の論議とその有効性

ここまで Guardini, R. の人間学的論議を、とりわけその動的視野によって焦点化された人間の存在とその生成における人格的実存の論議を辿ってきた。彼のそのような実存的な人間学的論議は、先の像理論の静的規定性や先験的抽象性等を批判的に補完したものであり、それ故に、そこには能動的に生を押し進め、そして状況において克服的・創造的に生成する、そのような存在と生成のダイナミクスについての鋭敏な熟慮<sup>(79)</sup>が認められる。そして敢え

て誤解を恐れずに繰り返せば、Guardini, R. は、教育の本来的なるものも、そして人間の存在と生成も、それが全てであるときさえ言い切る<sup>(80)</sup>。このような戦略的な断定表現ではあるが、例えばDöpp-Vorwald, H. は、そこにのみ教育の本来的なるものを見出そうとしており<sup>(81)</sup>、このような姿勢は些か実存主義的な先鋭化であるとしても、そこに窺われ得る教育学的有效性については、適正に踏まえていかななくてはならない。

ところで、Guardini, R. は先の静的規定の論理についても自らがその限界と危険を分析したように、その動的規定の論理についても、同様に自己批判の目を光らす。Guardini, R. は次のように述べる；

「そのような現実主義的な考え方は、もしかしたら存在を分碎し、原子化してしまうかも知れない。そこには、何の連続性も認められず、何の創造も為されない。即ち、そこには世界全体や歴史的連関、行為や伝統についての連続性を見ることができない。全ての連関が、ただ空想のうちにのみあるが為に、それ以外のものにおいては、存在と行為の連続的機能が欠落する。ただ、そこでは孤立した邂逅や行為、瞬間を知るのみである。人格の連続性が脅かされ、そして失われゆく。ただ依然として決断においてのみ輝く。そのような様子は、芸術的ではあるとしても、そこに調和は感じられ得ない。そこでは美しさも消えかけ、特有の非人間的なるものが現れ来たる。そう、何か非人間的なるものである。個々のものはその断片性と不充分さに耐え忍ぶ。そして、悲劇の危険が脅かす。そこには新たなる種類の絶対性における存在を徒に高く見積もるような危険がある。そして、さらにはそれのみをもって世界と世界の行為について倫理的に絶対化するような危険がある。それは不遜なことである。まるで神に抗した終末期のタイタン族のように<sup>(82)</sup>。」

従って、Guardini, R. は、この動的規定によって先の静的規定を批判的に補完したとしても、それを絶対視することの危険をも十分に思念していたと言える。確かに、先の静的規定においては完全性や調和が強調されているのに比して、ここでは断片性や悲劇性が強調されることとなる<sup>(83)</sup>。無論、それは

何かダイナミックなもの、イニシアティヴの為の自由と言い換えることもできるのである<sup>84)</sup>。それ故に、Guardini, R. は、実存が全く断片的であり、そこに悲劇を覚えるとしても、そこに存在の美しさをも認めるのである<sup>85)</sup>。ここに人間の有限性を覚醒させる実存主義的意識と、近代教育学にみる甘美な主観主義的偏りに対する人間実存という視座からの実存主義的挑戦が認められる<sup>86)</sup>。

さて、確かに教育学における人間学的論議においては、人間の人格的実存が重要であるとしても、それを絶対視することによって生起する人間の原子的な崩壊を回避しなくてはならない。人間存在における一回性の実存が絶対的な真理であるというのは、やはり些か不遜な誇張である。断片的でそこに何の生きた連関も認められないような存在理解は、やはり人間学的認識においても生と存在が分断的に崩壊されかねない。そこで、Guardini, R. は次のように述べる；

「確かにそのような存在理解は、明白に有限なるものである。そのような存在形態は、絶対なるものの直接的な表現形態ではない。それは全く相対的なるものであり、確かな意味で偶然なるものと言える。そうではあっても、経験は、それが有限なるものであったとしても、それはやがてその存在の根本経験の一部となっていくのである<sup>87)</sup>。」

従って、人々が瞬間において如何なる実存を成就しようとも、それが絶対的なるものを普く直接的に表現しているわけではない。このような実存的な生成からは、何の完成も調和も生じることはないのである<sup>88)</sup>。ただ言えることは、それが可視的にどんなに断片的に見えても、それは存在の根本経験の一部としてそこに染み込んでいくということである。換言するならば、それが如何に儂いものであるとしても、個別経験の質は必ずそのうちなる存在形成の可能性の混沌へと立ち還るのである。そして、それによってそこから新たなものが生じ出づることができるのである。Guardini, R. は述べる；

「なるほど有限なるものは一回性の所与の賜であるかも知れない。そして、絶対なるものは依然として測り難い。そこに到る途も知らず、それに類似した一回きりの形姿もどこかへと消え去ってしまう。ところが、有限の逆説的な契機は、神秘的な両面性をも併せ持つ。そして、そこには、その実質が何であるか明示され得ないとしても、それまでのものとは異なる何らかの新たな契機がどこかに含まれている。まさにそれによって、絶対なるものから生じ来たる深遠なるものと、そして本来的なるものが現れ来たる。その形象の辺縁には、その出来事の片隅には、そして天命の傍らには、次なるものが存在しているのである。」

まさに、人々が自らの生を能動的に生き、そして特有の状況において克服的・創造的に生成しようとする時、そこには新たな自己の存在可能性が、それと隣り合わせに立っている。そうであるならば、断片的な存在経験は、その存在形成の可能性の論理と正しく手を組むこととなる。即ち、一見してそこに明白な乖離が見受けられる静的規定と動的規定は、その論理において相互に補完的な連関を獲得することになるように思われる。これによって教育の本来的なるものがより明確に描かれていく。これについて、Guardini, R. は次のように述べる；

「教育的に本来的なものは、まさにあれらの規定体系の双方の弁証法的な交点にある。それはある単一概念をもって捉えられるのではなくして、寧ろ双方の概念の対置からのみ見えてくるのである。」

それでは、Guardini, R. の述べる弁証法的な交点には何があるのであろうか。実のところ、そこにこそ真に具体的・全体的な人間形成の形姿が描き出されていく。即ち、人間が一回性の具体的状況において決断し、真に具体的全体的なものに生成しゆく時、そこには個性的・特殊なものと同普遍的・一般的なものが止揚され、それによって個性・特殊が活かされ発展し、普遍・一般が個性・特殊のなかに新たな形態をとって新生する。従って、人格的実

存は、うちなる絶対の個別化・特殊化された新たなる存在形態であると言える。そして、そのような人格の実存において実現された存在契機は、やがて存在形成の可能性に発展的に活かされていく。そのように、それらは相互に基礎付けし得るような対置・止揚の関係にある。Guardini, R. は述べる；

「そのような教育的に本来的なるものは、それ自体のうちに、確定的な規定と、構造的なるもの、そして可変的なるものをも含んでいる。言うなれば、それはその存在の同一性を保証する確固たる構成とつねに変転する発展の統一である。人々は、数多くの動因において生成運動を遂行し、そして多様な展相を呈しながら生成しゆく。そのような人間は、その存在のうちに、一層多くの自己を所有しており、そしてその各々を生成において再認識し得る可能性が与えられる。またその反面、教育の本来的なるものは、何かダイナミックなものをも含まれる。それは、イニシアティブの自由、生成の活動空間、生成運動の開放性、そして予測不能なるものの可能性である。

まさにそれら双方の契機は、それ自体、前述において明示したように対置にある訳であるが、単一概念によってはもはや把握され得ない。そうではあっても、その統一はやはり概念的に推慮され、生において見出し得るのであるが。」

まさに Guardini, R. は、そこに人間の存在と生成のダイナミクスの核心、即ち、多様な動因を秘めた存在者が、一回性の状況下での決断による実質的な生成を通じて、そこにより新たな自己を発見し、それによって自らの存在可能性を肯定的に再確認し、その存在を促進していく生成的な存在形姿をみる。そこにあるのは、予定調和ではない勇猛なる克服的・前進的生成である。確かに、人々は自らが真に如何なるものであるのか厳密にはわからない。しかし、現実の生成を通じて、そして実際の存在形成を通じて自らの真なるものを確認していくことができる。人々はなにもものに成ることで自己の豊かさの一端を実体的に認識することができるのである。そして、それによって、また新たな自己の可能性がそこに芽生え出る。人間の勇猛なる前進的・克服的生成にこそ、Guardini, R. の、所謂、肯定の思想の基盤を認めることがで

きるのかも知れない。これによって、人間がまさに勇猛に前進していく、生成的な存在であることに想い至らされていくのである。

さて、ここでの差し当たっての Guardini, R. の人間学的功績は、まさに静的規定を補完する動的規定という視座の発見にあると言えるが、その本意は動的規定の絶対性の主張などではない。Bollnow, O. F. は次のように述べる；

「Guardini, R. は、ある教育学的問題設定から出発した。つまり、それは排他的な陶冶思考に方向付けられた教育学の一面性に対する批判である。これによって Guardini, R. は、そこでは、決定的なことが見落とされていたことに気づいた。即ち、そこにおいて具体的な個々の事物に態度をとり、特定の状況に存在し、自体を把握し、それを克服しなくてはならない具体的な個々の人間について見落とされていたのであった。」

Guardini, R. は、その人間学的論議において、それまでの教育学における人間学的認識において欠落していた、現実の具体的な状況の中で生を遂行する人間の存在と生成の実質についての視点を導き出したのである。抽象的な人間一般の存在形態は依然として観念の中に住まうとしても、現実にあるものは具体的な個々の生のみである。彼は、それについても正しく見極め、それを先の像理論に正しく補完することによって、人間の存在と生成の真の姿をみようと<sup>69</sup>した。つまり、彼は、その人間学的論議において実存主義的論議の扉をそこに取り付け、そこから映し出されるものとの弁証法的な対話を紡ぎ、それによって人間の存在と生成をより適正に描き出そうとしたのである。そこにこそ、Guardini, R. の人間学的論議の、その確固たる学的有効性が認められるように思われる。ただし、彼はそこで論議を止めず、さらにその先へと進もうとした。即ち、それまでもそうであったように、彼は自らの人間学的営為において導き出し得た、この弁証法的な交点にも謙虚に自己批判の目を向け、それに欠落するものを思念していったのである。これについては、

稿を改め、更に周到に探っていく必要がある。しかしながら、Guardini, R. のそれまでの学的営為によって描き出された弁証法的な交点は、その人間学的論議の拡がりを更に啓き得る論理的方向性の有効な一契機として捉えられていかななくてはならない。

## 2.5. 体育学における人間学的論議とその一つの方向性

体育学が、人間の何たるかを問い、それを誠実に探究していく時、何よりもそれを正しく論じる為の有効な知的契機が求められる。体育学における人間学的論議は、独自の論議を立ち起こす前に、まず関連領域の先行論議に学び、その思考能力を適正なものへと高めていかななくてはならない。ここでは、それが教育学の人間学的論議に類比的であると考え、そこに目を向け、直接的な分析対象を求めてみた。そうではあっても、体育学における人間学的な課題は、やはり最終的には体育学的思考において論じられる必要がある。従って、ここで辿ってきた Guardini, R. の人間学的論議についても、それを無批判に受容するのではなく、体育学の学的土壌において改めて練り上げ、そこに体育学的思考の血脈を通わせていかななくてはならない。そこで、Guardini, R. の人間学的論議において導き出された人格的実存の論理に基づいて、体育学における人間学的論議を試み、その学的認識の新たな拡がりを模索してみたい。

体育学における人間学的な視野に顕著に映ずる人間の存在形態は、まず身体運動やスポーツとの関わりの中で把握されることであろう。一般に、体育事象において行われるスポーツという文化事象に顕現する存在形態は、身体的・文化的に把握され得る。ところが、その内実は、究極的には、精神的な存在形式という視点からのみ適切に把握されるという<sup>67)</sup>。スポーツの具体的な文化形式を身に纏った諸々の諸現象も、それは確かに文化的に形式化された存在現象ではあるとしても、その本質を正しく捉えようとするならば、それを精神的な存在現象として眺めてみる必要がある。そうであるならば、それらは、Guardini, R. に従い、その存在うちの深まりに住まう神性の人格的実

現という視座としても描かれていくことであろう。

体育事象において人々は自らがそれまでの生成史において作りあげてきた存在形成の可能性を秘めながら、現存在として匿名的に浮遊する。体育事象に映ずる多様な形姿は、その何れのものも、その存在形成の可能性の混沌に根源的な原因を有する。ところが、例えば、スポーツのある状況において自らの存在の能動性において決断し、そこに人格的に峻立しようとする時、そこに重要な何かが迫り来たり、それと対峙することとなる。それは特定の切迫した択一的状況であったり、敵対するプレイヤーであったり、または急峻な岩場であったり、もっともまるで予測はつかないのであるが。そして、そこでこそ人々はうちなるもののよさや豊かさが試されることとなる。それはまさに自らの存在の真なるものを賭けた戦いとも言える。それは、刹那の瞬間であったとしても、その存在の中核を揺さぶり動かすことであろう。そして、そのような戦いにおいて堪え残るものが人格態を採り、真なる実存をその存在に成就する。スポーツにおける達成や至高体験、身を貫くような歓喜や咆哮、そして全力を尽くした後の高揚やゆるしも、それらは常にその存在形成の可能性に秘められており、それが真なるものであったが故に、邂逅を契機として人格的に実現されていく。うちなる神性は、その時、彼の人格に映え、彼そのものとして世界に存在を主張するのである。そして、そのような人格的実存の成就是、そこから有効な契機を持ち還り、また存在形成の可能性の混沌へと有意味に秘められていく。スポーツにおけるそのような存在形成の戦いも、他のものと同様に、存在形成の可能性をよく耕していく。そして、それは、実質的な形式としてではなく、寧ろ混沌のまま潜在的に高まりゆくのである。Guardini, R. の言い回しを借りるならば、スポーツにおいて成された人格的実存の戦いも、そらが正しいならば結果を問わず、そのうちなる像を高めゆくことができるのである。即ち、体育事象においても邂逅が生起し得る。

ところが、そのような存在形成のよき戦いは、誰にでも等しく降り来たるものではない。それは、体育事象においても、なお永きに亘って続けられた



努力という準備状況の上にこそ生じるのである。即ち、それは自らを賭け、永続的に努力を積み重ね、存在形成の可能性を耕していく過程にこそ、降り来たるものである。それが無ければ、邂逅はただの人間的な交わりや状況との単なる遭遇に終始してしまい、そこから相応の有効な契機を汲み取ることができないことであろう。これは決して単なる技能的な問題ではなく、寧ろ内面の豊かさの問題である。スポーツにおいて自らを研ぎ澄ませ、例えば技能的に拙くても、そのうちを正しく耕し続けた準備状況にこそ、邂逅を降り来たり、その人格的な戦いにおいて内面が揺さぶられ、存在の本質が検証されていく。従って、スポーツにおいてよき人格的実存は、あらゆる存在状況における努力を前提とする。そのように考えるならば、人々はどこにあっても、みずからの本質を正しく耕さなくてはならないのである。また、それと同等に、スポーツにおいてよく耕された存在形成の可能性は、他の存在状況における人格的実存の成就にも活かされていく筈である。換言するならば、よき陶冶はスポーツにおけるよき人格的実存を可能性として保証してくれる。そして、スポーツにおけるよき陶冶も、よき人格的実存へと繋がっていくように思われる。何れにせよ、スポーツにおいて自らを練り上げ、研ぎ澄ませ、高めゆく生成的努力は、即物的な可視的効果よりも、うちなる存在形成を正しく耕してくれる。

従って、スポーツにおけるそのような精神的な努力や試練は、パフォーマンスの結果よりも、より豊かな贈り物が与えられる可能性がある。例えば試合に負けたとしても、勝者以上の贈り物を得ることもあるだろう。そうであるならば、体育学における人間学的論議は、そこを正しく見つめなくてはならない。山頂に登り詰めたり、全国制覇を成し遂げたり、あるいは苦しみながらも完泳を果たしたり、挫折を乗り越え、再びスタートラインに立ったり、それらのスポーツ的な形姿は、確かに可視的な見映えに心惹かれてしまうこともあるが、その真なる実質は、うちなる存在形成の可能性の高まりゆく一つ一つの実相であると言える。体育学は、それらをその人間学的視野に確実に捉え、より正しく論じていかななくてはならない。

このように考えてくるならば、体育学における人間学的論議は、Guardini, R. の示した人格的実存の論議によって、新たな認識の地平が拓かれていく。即ち、それは、それまでの段階的・連続的な生成理論に基づく人間学的認識によって捉えられ得なかった、非連続的な生成のダイナミクスへと視野が及ぶ、実存主義的な思考方向である。もっともそれらを一概に実存主義的と銘打つことはいとも危険ではあるが、少なくとも体育学における人間学的論議において拓かれゆく思考方向の一端は、実存主義的視野との対話・対決にこそあるのかも知れない。そのような実存主義的な論議の試みは、体育学においても、なお実り豊かな人間学的基盤を獲得する為の有効な視角を提示してくれることであろう。そして、おそらくそのような実存主義思想的な視野は、体育事象において瞬間瞬間に立ち現れそして消え入る彼らの様々な存在形成を、人間学的論議において有意味なものとして読み込み、予定調和的な論議の形式性に実り豊かな実質を補完してくれることであろう。そして、そのようにして描かれる弁証法的な交点にこそ、体育学における人間学的論議の中核が見え隠れするのではないだろうか。

### 3. 結 語

人間学的な課題は学の歴史においても極めて難解なものであり、それは体育学という枠内においても、依然として困難であることに変わりはない。そうではあっても、体育事象から内発的に立ち興った課題は、やはりどこまでいっても体育学な問題である。従って、体育学はそのような人間学的課題に対して、他領域の知見に正しく学びながらも、少なくとも能動的に学的努力を進めていかななくてはならないように思われる。そして、そのような体育学における人間学的営為は、体育学の学理論に対しても確かな学的基礎を付与してくれる筈である。即ち、体育学が人間学的認識を正しく有することは、体育学それ自体の確立と発展へと繋がっていくことであろう。

このように考えるならば、ここで辿ってきた Guardini, R. の人間学的論議

についても、その論理の詳細と真意を正しく踏まえることによって、そこから体育学における人間学的認識の拡充に資する一つの新たな知的契機が啓かれてくるように思われる。そして、ここで辿ってきた Guardini, R. の人間学的論議は、何よりも人間の人格的実存の問題に焦点化され、彼がそこで照射した人間の存在と生成の様相が、次のように描かれていき得る。即ち、人間は、そのうちに存在形成の可能性を秘め、それを多くの有効な生の現象を通して耕しているが、その高まり到った豊かさは、ある契機を得てその存在に人格的に実現され、現世において真の自己を実現する。そして、人間はそこから有効な契機を得て存在の本質に立ち還り、それによって存在形成の可能性を耕し、そして更に高めゆく。高まりゆくその生成の過程は、非連続で瞬間的な人格的実存とそこから得られる有効な契機を取り入れながらも、次第に高まりゆくのである。無論、Guardini, R. の論理を忠実に踏襲するならば、その高まりゆく到達点は、絶対者としての神であり、その過程における人格的実存の成就是、何よりもキリスト教的実存に他ならないのであるが。従って、ここでは Guardini, R. の論理の一般的形式を抽出することに留め置き、その神学臭を抜きさった思考形式を、可能な限り正しく踏まえることによって、体育学における人間学的論議とその認識の拡がりを得ようとつとめてきたのである。そして、体育学における人間学的論議は、Guardini, R. に導かれて、更にそこから先をも問わなくてはならない。つまり、体育学における人間学的論議においては、Guardini, R. が描いた弁証法的交点に映し出される存在形姿と生成の様相が、次なる問題として立ち現れてくるのである。体育学における人間学的論議は、それが少しずつではあるとしても、新たな段階へと歩み進んでいるのではないだろうか。恰も亀の歩みにも似た軽微な進展であったとしても、それは体育学にとって重要な、そして確実な意味をもたらしてくれるように思われる。

## 4. 註および参考・引用文献

- (1) 川村英男 (1966) 体育原理, 体育の科学社, p.75.
- (2) Flitner, W. (1970) Allgemeine Pädagogik, Ernst Klett Verlag, S.13.
- (3) Gerner, B.: 岡本英明訳, (1975) 教育人間学入門, 理想社, p.35.
- (4) 小林博英 (1984) 教育の人間学的研究, 九州大学出版会, p.108.
- (5) 佐藤臣彦 (1985) 体育概念における範疇論的考察—体育概念に関する岸野理論の批判的検討を通して—, 筑波大学体育科学系紀要, 8: 17-18.
- (6) 杉谷雅文 (1974) 現代のドイツ教育学, 玉川大学出版部, p.7.
- (7) 拙稿 (2001) 「体育学における人間学的視座の一方とその基礎的契機の有効性—Guardini, R. の教育学を中心として—」中央学院大学人間自然論叢, 13.
- (8) Kuhn, H. (1961) Romano Guardini Der Mensch und das Werk, Kosel-Verlag, S.16-34.
- (9) 平野智美 (1974) ゲアルディーニ, 杉谷雅文 (編) 現代のドイツ教育哲学, 玉川大学出版部, p.288.
- (10) 平野智美 (1968) 教育活動の人間学的基礎—実存哲学を中心として—, 上智大学教育学心理学論集, 37.
- (11) 平山久美子 (1979) R. ゲアルディーニの陶冶理論における対立 (Gegensatz) 概念の意義について, 上智大学教育学研究, p.13.
- (12) Guardini, R. (1950) Das Ende der Neuzeit, IM Werkbund Verlag, S.102.
- (13) 平野智美, op. cit., (9), p.290.
- (14) Guardini, R. (1959) Grundlegung der Bildungslehre, Werkbund Verlag, S.83.
- (15) Guardini, R., ditto, S.7.
- (16) 平野智美, op. cit., (9), p.290.
- (17) 平野智美, ibid., p.290.
- (18) 平野智美, ibid., p.291.
- (19) Guardini, R., a, a, O., (14), S.22.
- (20) 平野智美, op.cit., (9), p.291.
- (21) Bollnow, O. F. (1956) Das veränderte Bild vom Menschen und sein Einfluss auf das pädagogische Denken. Erziehung Wozu? Alfred Kroner Verlag, S.35.
- (22) 平野智美, op.cit., (9), p.291.
- (23) Bollnow, O. F. (1959) Existenzphilosophie und Pädagogik, W. Kohlhammer Verlag, S.12.

- (24) Bollnow, O. F., ditto, S.25
- (25) 平野智美, op. cit., (9), p.291.
- (26) Guardini, R. (1954) Die Verantwortung des Studenten für die Kultur, Die Verantwortung der Universität, Werkbund Verlag, S.27.
- (27) 杉谷雅文 (1960) 人間観の変遷と現代教育学. 教育哲学研究, 2 : 4.
- (28) Guardini, R., a, a, O., (12), S.86-88.
- (29) Guardini, R., a, a, O., (14), S.6.
- (30) 平野智美, op. cit., (9), p.289.
- (31) 平野智美, ibid., p.291.
- (32) Guardini, R., a, a, O., (14), S.22.
- (33) 平野智美, op. cit., (9), p.291.
- (34) Guardini, R., a, a, O., (14), SS.6-7.
- (35) 平野智美, op. cit., (9), p.289.
- (36) Guardini, R., a, a, O., (14), S.19.
- (37) Guardini, R., ditto, S.8.
- (38) 平野智美, op. cit., (9), pp.289-290.
- (39) Guardini, R., a, a, O., (14), S.86.
- (40) Guardini, R., ditto, SS.87-88.
- (41) Guardini, R., ditto, S.23.
- (42) 平野智美 (1960) ゲアルディニーにおける教育学の基礎構造, 教育哲学研究, 2 : 70.
- (43) 平野智美, op. cit., (9), p.293.
- (44) Guardini, R., a, a, O., (14), S.23.
- (45) Guardini, R., ditto, SS.24-25.
- (46) 平山久美子, op.cit., (11), p.20.
- (47) Guardini, R., a, a, O., (14), S.25.
- (48) Guardini, R., ditto, S.26.
- (49) Guardini, R., ditto, S.27.
- (50) Guardini, R., ditto, S.23.
- (51) 平野智美, op. cit., (9), pp.293-294.
- (52) Guardini, R., a, a, O., (14), S.34.
- (53) 境沢和男 (1960) 教育における実存の問題の視点, 教育哲学研究, 2 : 21.
- (54) Guardini, R., a, a, O., (12), S.118.
- (55) 平野智美, op. cit., (42), p.68.
- (56) 平野智美, ibid., p.71.

- (57) Guardini, R., a, a, O., (14), S.29.
- (58) 平野智美, op. cit., (9), p.294.
- (59) Guardini, R., a, a, O., (14), S.34.
- (60) 平野智美, op. cit., (9), p.294.
- (61) 平野智美, op. cit., (42), p.71.
- (62) Guardini, R., a, a, O., (14), S.31.
- (63) 平野智美, op. cit., (42), p.72.
- (64) 平山久美子, op. cit., (11), p.14.
- (65) Guardini, R., a, a, O., (14), SS.31-32.
- (66) Guardini, R. (1969) Die Begegnung, Guardini, R· Bollnow, O. F. (Hrsg.)  
Begegnung und Bildung, IM Werkbund Verlag, S.14.
- (67) Bollnow, O. F., a, a, O., (23), S.101.
- (68) 平野智美, op. cit., (42), p.71.
- (69) Guardini, R., a, a, O., (14), SS.32-33.
- (70) 平野智美, op. cit., (9), p.294.
- (71) Bollnow, O. F., a, a, O., (23), S.100.
- (72) Guardini, R., a, a, O., (14), S.33.
- (73) Bollnow, O. F., a, a, O., (23), S.100.
- (74) Guardini, R., a, a, O., (14), S.31.
- (75) Guardini, R., ditto, S.34.
- (76) 平野智美, op. cit., (9), p.294.
- (77) Bollnow, O. F., a, a, O., (23), S.117.
- (78) Bollnow, O. F., ditto, S.118.
- (79) 桜井佳樹 (1989) 理念なき時代のビルドゥングーガルディーニのビルドゥ  
ング論における「弁証法」の問題, 教育哲学研究, 60 : 33.
- (80) Guardini, R., a, a, O., (14), S.32.
- (81) 桜井佳樹, op. cit., (79), p.36.
- (82) Guardini, R., a, a, O., (14), SS.35-36.
- (83) 平山久美子, op. cit., (11), p.21.
- (84) 桜井佳樹, op. cit., (79), p.34.
- (85) Guardini, R., a, a, O., (14), SS.32-33.
- (86) 平野智美, op. cit., (9), p.296.
- (87) Guardini, R., a, a, O., (14), S.33.
- (88) 平山久美子, op. cit., (11), p.21.
- (89) Guardini, R., a, a, O., (14), S.33.

- (90) Guardini, R., ditto, S.36.
- (91) 平野智美, op. cit., (9), p.296.
- (92) Guardini, R., a, a, O., (14), S.34.
- (93) Guardini, R., ditto, SS.36-37.
- (94) Guardini, R., ditto, S.34.
- (95) Bollnow, O. F. (1969) *Begegnung und Bildung*, Guardini, R · Bollnow, O. F. (hrsg.) *Begegnung und Bildung*, IM Werkbund Verlag, S.43.
- (96) 平野智美, op. cit., (9), p.294.
- (97) Nosbüsch, J. (1976) *Moderne Anthropologie und ihre Bedeutung für Pädagogik*, Höltershinken, D. (Hrsg.) *Das Problem der pädagogischen Anthropologie im deutschsprachigen Raum* Wissenschaftliche Buchgesellschaft, S.187.
- (98) 平野智美 (1968) 教育活動の人間学的基礎—実存哲学を中心として—, 上智大学教育学心理学論集, 3 : 34.